

若い人たちの集う赤坂の画廊で



たとえば、女子高生が「池田満寿夫」を買う  
若い人たちの集う赤坂の画廊で  
チャームなオーナーに会う

けやき通りで15年の画廊。  
驚くほど若い人達が集い、  
作品を買ってゆく理由

福岡市中央区赤坂、けやき通り沿いの2階にある「画廊香月」。私が訪れるのはいつもまぎろて夕方、それは学生時代がこの10年ほど変わらない。概ね自信をなくした時や、人間関係に悩んだ際に訪れるので、その心の記憶とも相まって「画廊香月」は私の中でいつも夕暮れの中にある。

もう15年にもなるということだ。いつ訪れても変わった様子はないのだが、全く古さを感じさせない。それはそのまま、いつもここで微笑んで迎えてくれる、オーナーの森田俊一郎さんにも通じる印象だ。とても50歳を超えているとは思えないほど元気でチャームな男性。彼によつて励まされた、社会にうまく馴染めない感受性の強い女の子達が、どれほしかったことだろう。

例によつて、今でも夕方訪れると、よく若い人に出会う。ブランドものではないお洒落に身を包んだ、学生らしい様子の彼女達。実はすでに絵画の所有者であったりするの、この画廊では珍しくないことだ。たとえば「池田満寿夫展」が開催された際には、ものすくすくロッキングな銅版画を女子高生が売却済みにして驚いたこともある。

学生、特に女子学生が、アルバイト代でアート作品を手に入れる画廊、洋服やアクセサリーよりもアートが優先？この不思議を紐解くのはとても簡単だ。「森田さんがいるから」

絵画の所有者となる「非日常」が、森田さんの前ではすんなりと「日常」になる。だつて森田さんは、そうやってずっと幸せに生きているから。  
つまり森田さんは、彼女達にとつて、夢の大人なのだ。



右ノどしりと重い木枠のついたガラスの扉、2階にある画廊まで階段を上り、この扉を押す時には、すでに画廊内から誰かが微笑んでいたりする。

中央ノページュの壁と、味わい強い木材によつて包まれたシックな画廊内。常駐している加子さんと、オーナー森田さんの、師弟とも親子とも友達ともつかない、軽快な会話が楽しい。

左ノこの一杯のお茶で、どれほどの会話がなされたか... 時には甘いものも持ち込まれて。

「絵に向き合う」ということは、  
自分に向き合うことです」

数年前にはピンとこなかった作品が、年月を経て再会してみると、しみじみと胸に迫ってくる。ということがある。森田さんはこれを、「アートにさらけ感動できるようなこと」とは、成長した自分に出会えることと語る。「絵に向き合うことは、自分に向き合うことなのだ」と。アートがわからないと画廊や美術館を敬遠する人もいるけれど、森田さん曰く、アートは「わかる」ものとは少し違うとか。

「たとえばイタリアで何百年という歴史ある教会に入って、自然と泣きそうになつてしまったという女性がいました。普通のものに触れて、心が震えたんですね。アートに触れることも同じ。『わかる』のではなく、普通のものを感ずる直感を若い人達に磨いてほしい。」



左／「画廊香月」オーナー、アートプロデューサーの森田俊一郎さん。1954年生まれ。10年間勤めた食品会社を退職後、91年、「画廊香月」をオープン。アート、アーティストについて語り出すと、熱のこもった言葉が次々とあふれ、聞き入っているうちに何時間経ってしまふことはしばしば。いつもさりげなくお茶を淹れ、森田さんとは、洋服の履き方もさりげなく上がってしまふ。

下／森田さんの住むマンションから画廊までは、いつもこの自転車移動。この自転車が画廊の前にある時は、森田さんも画廊の中。



アーティストは素敵な大人。  
ここは、そんな大人達に  
出会える場所なんです」

森田さんと話す時には、そばによく甘いものがあつた。おはぎやクッキー、チョコレートをつまみながら、会話を弾ませた。そんなささくばらんな空間に、アートが違和感なく共存しているのが面白いと思う。これこそ、森田さんがいって作り出せる、「画廊香月」独特の空気なのかもしれない。甘いお菓子もアートも同等に、森田さんの日常で「幸せ」を構成する要素なのだろう。こんな大人は、私の周りにはなかなかいない。近年、ネット上で知り合った若者たちが集団自殺してしまうという、悲しい事件を耳にする。森田さんはこれを、「素敵な大人に出会っていないから、自分が何をしたいのかわからなくなっているんじゃないかな」と言う。

「素敵な大人」  
画廊では確かに、たくさん素敵な大人に出会える。そう、アーティストだ。各アーティストの展覧会では、まず初日にオープニングパーティーがあり、そのアーティスト本人が画廊にやってくる。実は私自身、「わたくしアーティストに会いに行つた」とはないが、何かを渴望するようにアーティストに会いに来る若者たちはたくさんいる。

「好きなのとしか、しない大人」というのが、森田さんの言うアーティスト。それだけ聞くとお気楽な大人のようにだが、実はすごく難しい。ただ、信念がなくては続けられないし、生活するためには諦めなければならぬことも、たくさんあるだろう。そう、私も痛感すると云ふ。森田さんは、そんなアーティスト達に出会える画廊を、「素敵な大人に出会える場所」と言う。

でも私にとっては学生時代から、森田さんだつて「素敵な大人」だ。いつかはアーティストにも正々堂々と出会いたい。が、私はすでに森田さんに出会っている。

画廊にやって来るのは、  
なぜ女の子ばかりなのか？

森田さんが力いっぱい励まして、元氣になつて日常生活を送る女の子は、今も昔もたくさんいると思う。でも、なぜ女の子ばかりなのだろう。「男の子の方が社会的になりやすいから、アートには振り向かないのかもな」と、森田さん。そうかも知れないですね。と答えるながら、私はひそかに思う。「チャーム」な森田さんのキラキラも、女の子を必然的に呼んでいるのでは？。絶対的のびすぎるこのない、さりげなくキマツた髪型を眺めながら……

左／私が初めて絵を買ったのは、21歳の時。喫茶店でアルバイトして貯めたお金で、16万円の油彩画を手に入れた。絵を引き取りに行った日に、画廊に来ていた若い男の子が、ピアノで自作の曲を演奏してくれて、胸がいっぱいになった。

右／初めて買った絵。藤田比呂志さんの「みどり香る頃」。陸奥A子さんの楽園に出てくるような華やかな女性たちが、フランスの公園を歩いている。「乙女」一枚。

